32

『洪氏集験方』の鍼灸について

宮川　隆弘
日本鍼灸研究会

『洪氏集験方』5巻の著者・洪遵（1120–1174）の伝は，『宋史』列伝巻132に見える．遵は鄱陽（江西省波陽）の人，政和の進士・洪皓の次子で，字は景厳，諡は文安，詞科に中り，選抜されて秘書省正字と為った．歴官，建白する所多く，南宋の乾道6年（1170）には資政殿学士に累進している．本書以外の著作に『訂正史記真本凡例』『泉志』『翰苑群書』があるとされる．本書は『宋史』芸文志では著者名を「不知名」とするも，本書の巻末に「右集験方五巻，皆予平生用之有著験，或雖未及用，而伝聞之審者，刻之姑孰，與衆共之．乾道庚寅十二月十日番陽洪遵書」とあることから，洪遵が資政殿学士に進んだ乾道6年に姑孰（安徽省当塗）で跋刊したものと知れる．

本書は，初刻の南宋・乾道六年姑孰郡斎刊本（北京図書館現蔵）以降，絶えて重刊されることがなかったが，清の黄丕烈が嘉慶24年（1819年）に伝存したその一本を得て影宋版を刊行，以降，それに基づく重刊が民国時代までに10回以上行われた．一方，日本においては，『医籍考』巻48（方論26）にも「佚」とされており，先の影宋版刊行にも関わらず，わが国に伝わらなかった医学書の一つと考えられる．

本書は処方167首を収めた医方書であるが，鍼灸条文も散見する．たとえば巻第二・癰疽では，郭廷圭知縣伝の「発背灸法」が見える．その内容は，「先用蛜線，度左手中指頭，至手掌下横紋止．其横紋有三両條，当以長而分明者為正．却将所度蛜線，自尾閭骨取中，逆量至脊槌骨，如度之長，以墨記之．次以蛜線取中指中節，量一寸．中指中節両頭横紋多，当側取横紋中，長而分明者為正．却将所量蛜線，横於墨点処，毎辺各量一寸，朱点記之，此正灸穴処．前以墨処乃用取中，非灸穴也．視背疽発於左則灸右，発右則灸左，甚則左右皆灸，至三十壮而止．婦人則用右手中指取度，其灸法與男子同．婦人奶癰，凡発背，発肋，発脳，発腿之類，不論男女皆可灸．郭云，自得此法，救人不可勝計．有親戚姓陳者，得此疾，其妻児告急，而陳苦不之信，迫不得已灸之．才十壮，其紅腫処漸消，於是欣然聴命．再灸二十壮，覚熱毒之気従腫処下，如以手拓，従尾閭骨発散，陳至今無恙．又云，荘婦忽背間癢痛，傴背以行，問知其状，使以法灸，隨手即愈．如是非一，不能尽記．」とあり，取穴法の便法や反対側ならびに両側への施術を，治験例を交えて述べたもので，これに続き葉子昂丞相伝の「発背灸法」の便法も収録している．巻第三では，「灸結胸傷寒，不問陰陽二毒，只微有気者，皆可灸，下火立效．」として，黄連と巴豆を臍に置き，灸を一壮すえるという隔物灸が記されている．巻第四では，「灸労法」と題して，「以肚臍相対，取背脊骨灸之，甚妙．」とする灸法，「治脚気灸法」と題して風市穴を使った脚気灸法が述べられている．また「治鼻衄不可止欲絶者」と題して，まず茅花を利用した治験例を数例述べ，更に「急灸項後髪際両筋間宛宛中，三壮立定．蓋血自此入脳，注鼻中，常人以線勒頸後尚可止衄，此灸決効無疑．」として，鼻出血への灸法も収録されている．

本書の大きな特徴は，処方，病症，薬物の功能，そして鍼灸を述べるに際し，著者が実際に見聞，または経験した症例を述べていることにある．本書は，宋代の初刊以降，約650年もの間流布することがなかったが，宋代の医学を考究する上で非常に重要なテキストである．管見によれば，鍼灸の内容も，宋以前の医学書に見られない内容と見られる．